

希望

チューリツヒ日本人学校便り

平成 27 年 10 月 12 日 発行

第 23 号

発行人 校長 鈴木史良

よい魅力ある学校にしよう

—— 「あいさつ・へんじ+ α 」を磨き、輝かせるには？ ——

秋休みが終わり、後期の授業が始まりました。後期は時間割や教科担任の先生の変更という大きな変化がありますので、早く慣れ、自分のリズムやペースをつくって授業に臨むことが大切です。

前期間を通して、本校は“よい意味で家族的な雰囲気をもつ小規模校”という伝統の強みを発揮してきました。各学年わけへだてなく行事や委員会活動に取り組んだり、上級生がすすんで下級生の面倒をみたりする姿にはいつも感心させられます。

ただ、“親しき仲にも礼儀あり”の言を待つまでもなく、何か一つ「けじめ」ある行動や活動が校内で徹底されると、子どもたちや教職員の動きが変わり、それが学校全体をひきしめ、その学校の魅力をさらに高めるのではないかと私は思っています。

5月の全校朝会では、教育者、森信三の実践「朝の挨拶・ハイという返事・履物をそろえ椅子を入れる」を紹介し、本校として「あいさつ・へんじ+ α (アルファ)」の実践を提案しました。「あいさつ」や「へんじ」は、以前からも児童生徒会活動などで取り組んできていたようで、大きな声で挨拶する子どもたちが多くみられました。しかし、リズム感よく3つ並べると、子どもたちの目にも新鮮に映ったらしく、挨拶や返事の声が以前よりも大きくなりました。それにも増して教職員を驚かせたのが「くつならべ」です。本校の図書室はカーペット敷きで、入室者は土足を脱いで入室しています。そこで全校児童生徒が集まる集会等がおこなわれた時の「くつならべ」の劇的な変化に、先生方が目を丸くしました。気持ちよいくらいに整然と子どもたちのくつが並ぶようになったのです。子どもたちは、プラスアルファの実践として「くつならべ」に意識して取り組んでくれているんだなと感じました。

また、9月の全校集会では、「あいさつ」の仕方に焦点を当てました。それまでの子どもたちの挨拶は、お辞儀と同時に言葉を発していましたが「相手の気持ちを豊かにする挨拶とは？」について考えさせ、「語先後礼」という挨拶の仕方を教えたのです。「語先後礼」とは、相手の目を見てはっきりと言葉を伝え、その後にお辞儀をする方法です。この方法だと、より自分の気持ちが相手に伝わりやすいし、相手を尊重する礼儀正しさが強く印象に残るのです。この話をして以降、廊下ですれ違う時でも子どもたちは



5月全校朝会(上)とその後の「くつならべ」(下)



相手の目を見て言葉を発し、お辞儀するようになりました。もちろん、若干のぎこちなさは残っていますが……。

そして後期のスタートとなる全校朝会では、子どもたちに“三息(さんそく)の礼”という話をしました。お辞儀をする動作をもっとも美しく見せる方法と言ったらいいでしょうか。お辞儀（最敬礼の場合）する時には、まず息を吸い込みながら頭を下げ、頭を下げたまま息を吐き、再び息を吸い込みながら身体を起こす、という方法です。この仕方でお辞儀をすると、相手に丁寧で落ち着いた印象を与えるばかりか、自分自身も精神的に落ち着くと言われています。



酒井氏読み聞かせ「きつねのたび」

日常生活の些細なことですが、ひと手間かける労をいとわれない心を育てると、それによって子どもたちの行動が変化し、常態化していきます。それはやがて学校に出入りする人々の目にも明らかに映るようになるでしょう。小さな変化でもそれを積み上げていけば、やがてそれが学校の魅力となり、学校に対する周囲の信頼感も増してくるものと信じます。今後さらに、子どもたちと「あいさつ・へんじ+α」を追求し、本校の強みを数多く生み出していきたいと考えています。

「学習発表会舞台づくり」お手伝いのお願い

来たる10月24日(土)に、予定通り学習発表会を実施いたします。それに先立ちまして10月17日(土)午前9時から体育館に舞台を設営いたします。力仕事がありますので、もしお手すきの方がいらっしゃいましたら、恐縮ですがお手伝いいただくとありがたいです。内容は1時間程度の舞台組立作業です。当日は日本人学校体育館前にご集合ください。雨天でもおこないます。

詩を楽しむ

ウスターの街も黄葉に彩られる季節となった。日本の秋はくつきりとした透明色。夏のほてりが終息し、透明度を増した空気を通ってくるクリスタルの光のような明るさがある。そのなかに置かれた琴が、秋の美しさに共鳴して美しい音色を奏ではじめる……。

あるとき、浜松市の楽器博物館に立ち寄った。そこにはエオリアン・ハープという楽器が展示されていた。十九世紀のヨーロッパ上流社会で楽しまれた楽器で、中庭に置くとわずかな風の流れをとらえて音を奏するのだという。まさにこの詩の情景にぴったりと思えるのだが、八木重吉はこの楽器のことを知っていたのだろうか。

素朴な琴

この明るさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しさの耐えかねて
琴はずかに鳴りいだすだろう

八木 重吉

